

正月というと毎年帰省ラッシュのニュースが流れ、今年の正月もふるさとで久しぶりに懐かしい顔とめぐり会つたという方も多いと思われる。青森県では雪で不便を強いられるとはいえるが、現在は鉄道や高速道路など整備され、どこに行くに

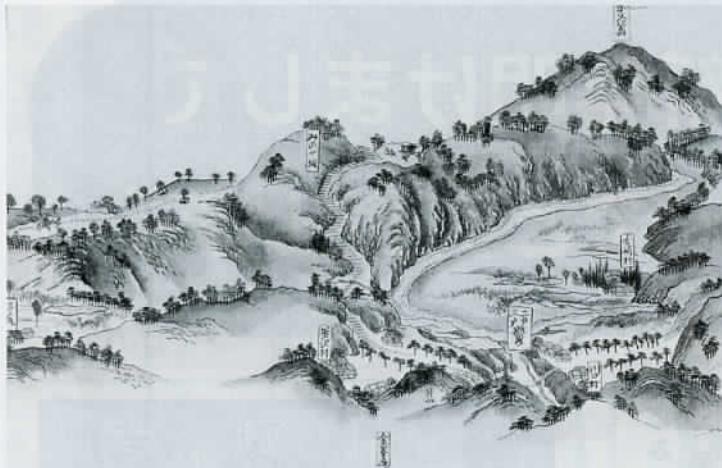
も安全で迅速な旅が楽しめている時代となつていて、戸時代には旅は相当の覚悟が必要なものであった。

今回は当時の県内の道路事情がどのようなものであつたのか、幕府の定めた幹線道路、いわゆる「五街道」の一つである奥州街道を例

て本県に入り、県内では戸と七戸の周辺を除いておおむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川

で日本海側を回ってきた羽州街道と合流三厩まで至るおむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川

-5-



「蓑ヶ坂」付近

(大日本国東山道陸奥州駅路図：青森県立図書館蔵)

として見ていただきたい。
奥州街道は、江戸から東北地方の太平洋側を北上して本県に入り、県内では戸と七戸の周辺を除いておむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川

で日本海側を回ってきた羽州街道と合流三厩まで至るおむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川

で日本海側を回ってきた羽州街道と合流三厩まで至るおむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川

で日本海側を回ってきた羽州街道と合流三厩まで至るおむね現在の国道4号線に近いルートをたどり、油川

一里塚や、馬門と狩場沢の藩境を示す藩境塚が築かれた間には盛岡藩と弘前藩の藩

境を示す藩境塚が築かれた

m (0.9 m) という三戸から

岩手県にかけての「蓑ヶ坂」など、坂が連続する難所が各所に存在して

江戸時代の道路事情

石塚雄士

(県民生活文化課県史編さんグループ)

ほか、馬門や狩場沢・野内には盛岡藩と弘前藩の番所が置かれて旅人の往来や物資の移動が厳しく監視されていた。

さて、そのような幹線道

路であれば、よく整備された広い道の両側に松並木が続いているという、安藤広重の「東海道五十三次」に描かれているようなイメージを持たれる方もいらっしゃるだろう。

その後、江戸時代も半ばを過ぎる頃にはこのようないい處も徐々に改善され、川がある。

しかし、江戸時代初期の奥州街道の状況を記した史料を見ると、県内には青森のままの砂浜を通っていたような場所でも街道としての体裁が整えられるようになる。そして原野を横切る街道筋に、風雨を防ぎ、雪中でも方角を見失わないよう

うにと柳や松の並木が植えられるに至って、我々が抱くイメージに近い街道の姿が形作られていったのである。

だが、このように整備が進んだ一方で、その路面は相変わらず雨が降ると一面の泥濘のままであり、山地の難所も明治に至るまで解消されなかつた。さらに冬には、あちこちで「牛馬不得自由、大雪之時ハ不通」という状況が毎年繰り返されていたのである。

主要街道である奥州街道ですらこうだつたことを思えば、他の街道の状況は想像するに難くない。そのよ

うな山あり谷ありの細道を一步一歩踏みしめて往来し